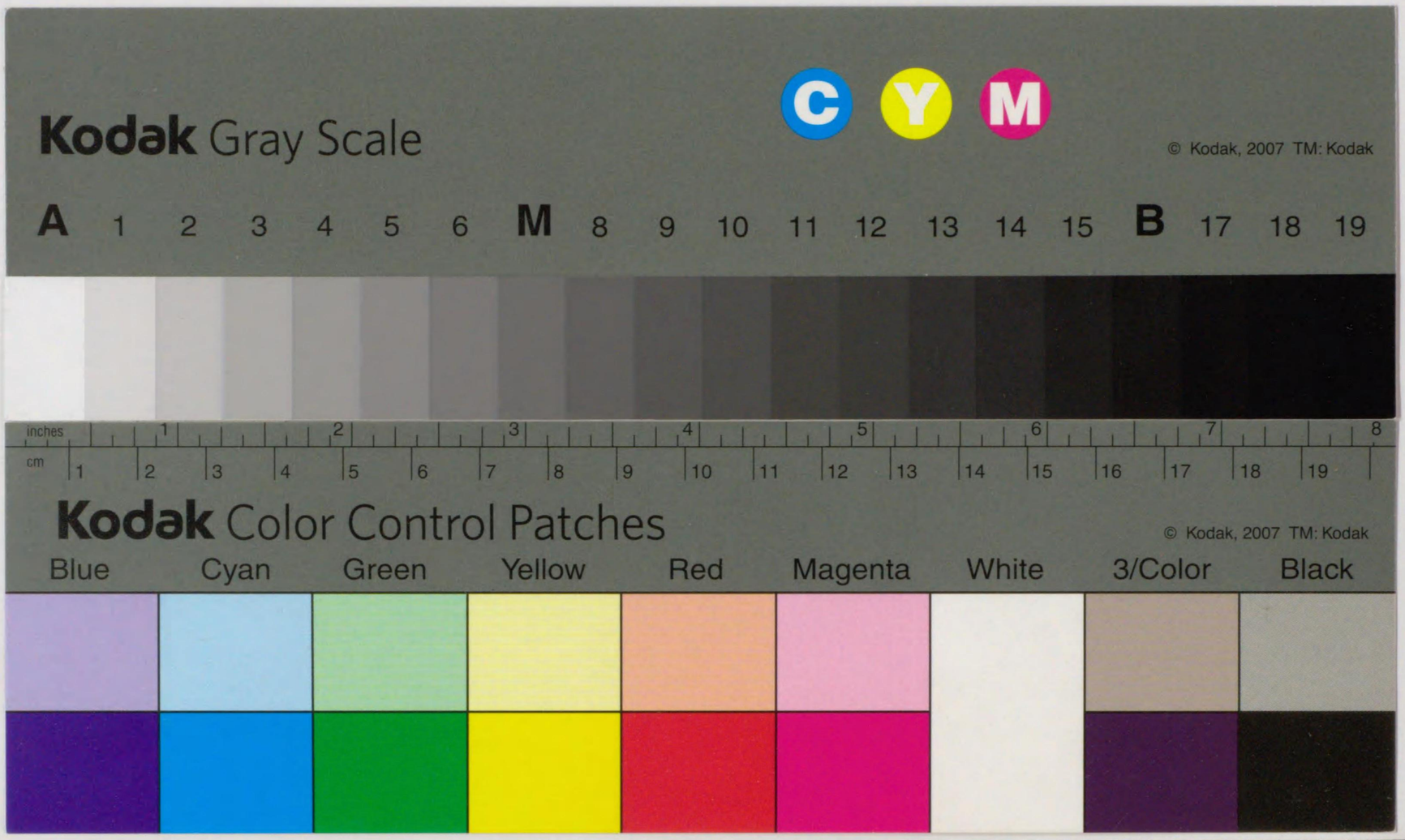


160 94
160-94
1200800015187

丙午紀行

天

160-94

丙午紀行

竹山隸古

大正
11. 12. 15
内交

丙午紀行(天)正誤

頁	行	誤	正
二九	一	卿	卿
三八	九	へ	不用
四七	一一	て	て
四九	六	家	宗
五五	四	函	亟
六七	九	〜	不用
六八	九	享	享

桃園之道于彼高岡
有斐君子令聞令望
永賜祚胤孝孫有慶
壬戌之春謹題 丙午紀行為
佐藤密君案 竹山高田忠周

日本地図一巻未だ其上梓の軍を審かにせざるも想ふに江川幕府後期文政以前に出ずず然れども今を距る約百年尓壅ひとせるの当時伊能忠敬既に嘖世の偉業を遂げ世を去れる後おゝも其業績は未だ此図に現はるに到らず本図は猶当時氏俗の間に能く行はれ且つよく特獨の發達をなし来りたる所謂驛伴地図の旧態を存して都邑の所在交通路の系統を示さん系觀交代東西商旅の好侶伴ありたるものと謂ふべく其の巻帙の大きて内容の精細なると共に一面地形の描寫に於頓着なしと頗る雅氣に富めるか如き偶ま以て此種地図の特色を能く發揮せるものと称すべく亦以て本邦製図史の一頁を代表するものと云ふに足らんか

大正十年 松雨之百

山崎直方 [illegible]

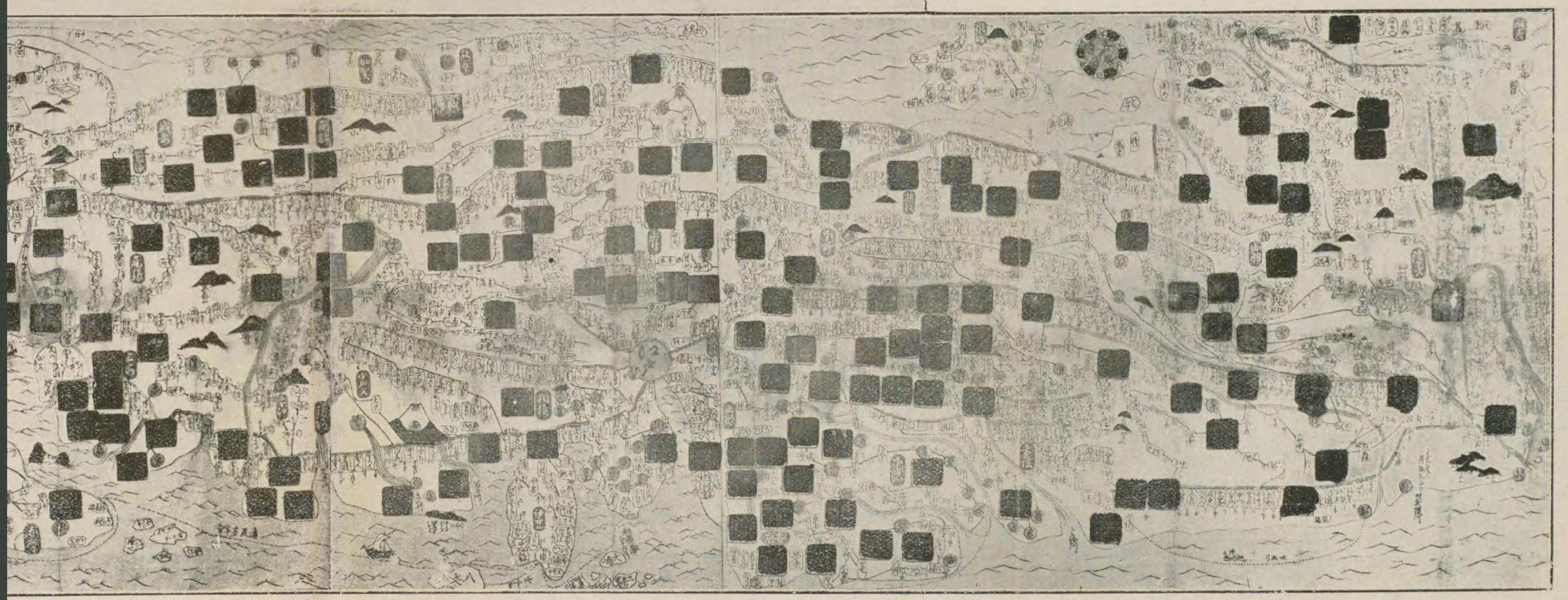
又正八年十一月廣島の殷友から招ばれて講演をしに往つた序ゝ久し振りで当時同地加島銀行支店長であつた佐藤榮君を訪ねた生憎病床に在られたが長い重患からいつと助かつたといふ話を受けて其幸運をよろこび合ひ夫から同君の好古癖から集めた古文書のうつゝ談が移る其時再見した中で一寸面白い思つたのが即ち此地図だ門外漢だから能くは今日ぬが東京に持つて帰り専門家に見て貰つたら如何かとすゝめたのが山崎理学博士の序言を得たに至つた因縁である佐藤君乃ち之につはあり更に此巻物を交換して欲値あらしめんとの野心を起して僕も何ぞ書けと強ゆる僕せどが書くを折角山崎博士の名文を依て上に見せず下りすぎといふて聴かず貪之人は銀行屋の機嫌を取つて益々に限りと覚悟をきわめ悪筆を臆面もなく振る事の通り

大正十一年七月三日 吉野作造

右日本総図驛路繪圖は江戸時代極盛期に成れるもの而して里出れ

日本地図一巻未ゟ其上梓の軍を審かにせざるも想ふに江川幕府後期文政以前に出でず然れども今を距る約百年ゟ壑へとせしの当時伊能忠敬臣に嘖世の偉業を遂げ世を去れるの後おゝも其業績は未ゟ此図に現ずるに到らず本図は猶当時氏俗の間に能く利を得且つよく特獨の發達をなす来りたる所謂驛伴地図の旧態を存して都邑の所在交通路の系統を示せる案觀交代東西商旅の好侶伴ありたるものと謂ふべく其の巻帙の大なりて内容の精細なると共に一面地形の描寫に無頓着なりして頗る稚氣に富めるか如き偶ま以て此種地図の特色を能く發揮せるものと称すべく亦以て本邦製図史の一頁を代表するものと云ふに足らんか

大正十年[illegible]雨之日

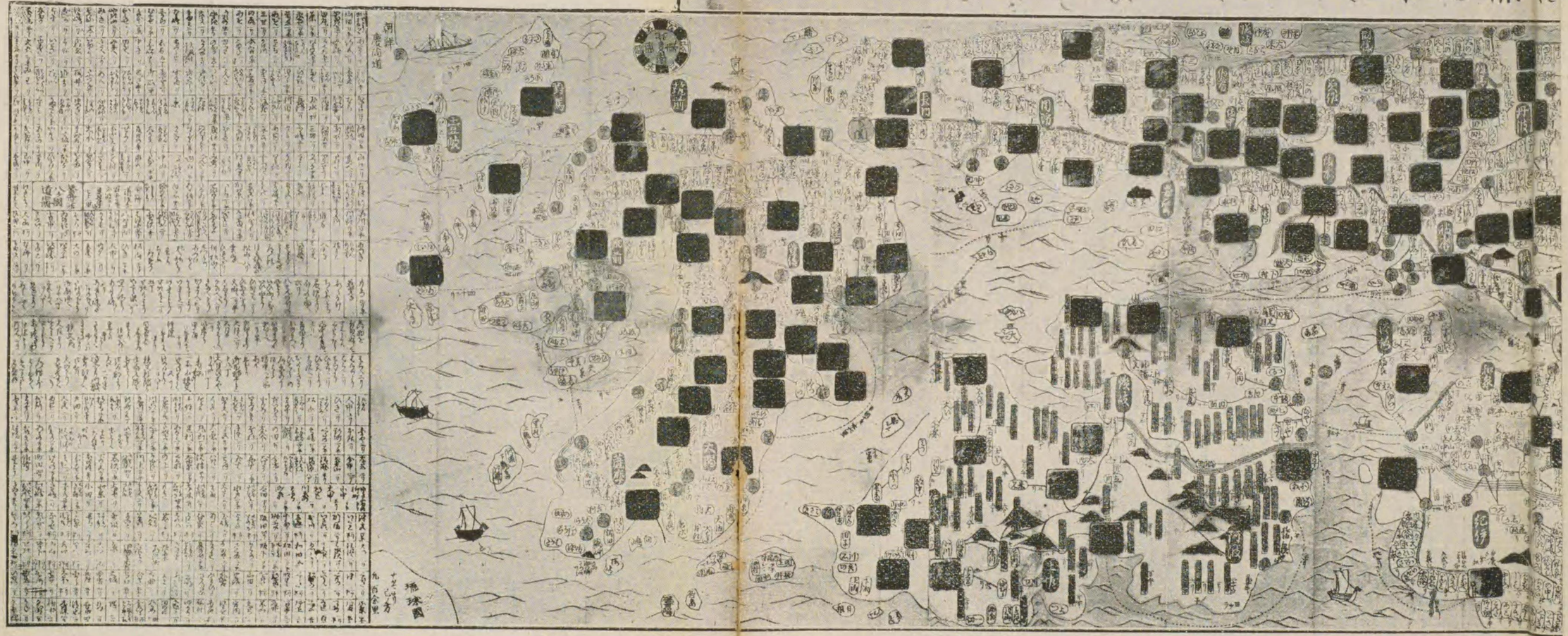


極盛期に於ける此石して黒松

既に近海に出没せしこのもの〻係
な全國三万諸侯をたゞし負海陸交通
の際路掌に指ゆるが如し且末尾に坂東
三十三所遠年附参ぐに旅行の案内を
記し高士釜山の人こゝに荷物を吉田に廻
して須走へ下る也と親切なる書振り
讀ゆゑ如何なる仏地なきを覚ゆ而のもまた
版畫に一種いとこのかゝまる趣味ありて
好古の僻を満足せしむべし佐藤君が
この図を獲てこれを珍蔵せらるしによって
余は君が趣味の人なるを知見せられし
あらはれたるに繪図なれもの〻為
めに喜び禁ずる能はざるも此のり乃ち
一言を記し聊以て責を塞くと云ふ

大正十一年二月吉祥日

文學博士黒板勝美



丙午紀行

自本藩至藝州

陸奥　桃園　佐藤脩亮著

嫡孫　佐藤　密校

天

二月十六日壬寅朝より折々雪降大風終日不止

同日漫遊出發の約に依て、常盤緑陰子今井利定脩亮一同晝九つ時出宿、兼て懇志の族、堰。の。下。にて。離。杯。を。採。て。送。別。あり。（校者曰く當時の光景以て想ふへし）金津通行後藤勝吉誘引に依て丸森藩中小野右膳宅に一同宿す、行程五里。

十七日朝の間烈風四つ頃より少々止
五つ半頃小野氏の邸出立、欠入御關所通行、里壬生より梁川に至り太田淡齋同所に出張に依て尋問す、然るに同朝出立の由旅亭にて聞き頗る殘懷にして直に出立、保原町にかゝり箱崎に至り、此所より下紐の關を遠望して

○思ひ立へたてはあらし旅衣
とけて嬉れしき下ひものせき

箱崎の舟渡しを越て、瀬の上へ着す、當所備中芦森(足守)木下肥州侯領所なり、此夜四つ頃より雨降出て追々大雨、明日の旅行覺束なくて

○小夜更て窓うつ雨を聞もうし
さらてもぬるゝ旅の枕に

旅宿宍戸屋甚吉、行程八里。

十八日五つ半頃雨晴

四つ時少々過き出宿、下鎌田間も那く鎌田を過て、右に羽黒の社有り、傍の山上に福島侯の祈願所藥王寺といふ寺あり、五十部村といふに至る、道の左に信夫文字摺(みちのくの信夫文字摺たれゆゑにみたれそめにしわれならなくに、河原左大臣)へ道有て標石を立たり行程廿六丁ニ、前日の雨天にて路次殊の外悪しく再遊を期し實地を踏ます

○問はすしも心の奥はみたれしな
今も其世をしのふもち摺

間もなく福島に達す、板倉采女侯の城下なり、采地三萬石にして繁昌の處なり、當所にて永田子に逢へり、最初會合の約有り喜悦

に堪へたり、根子町を過て若宮に達す、驛中左の方に八幡の社有り、八丁目に至り宿す、旅亭舛舍源五郎、道を取る事五里。

十九日朝の風吹折々雪降

明少々過出立、町出口に天満宮の社あり、傍に豊隆殿としるしたる額かけたる祠あり、信夫安達の境にして橋有り、程なく二本柳なり、町入口に安達山圓福寺といふ寺あり、町より東にうつしかゝ嶽といふ有り、山のかたちふしに似たり

○名に高きするかのふしの俤を
うつしか嶽の姿にそ見る

油井町を過て、福岡に至り八軒に達す、左の方に黒塚あり、僅に岩屋の様なるもの殘れるよしゝ、二本松に至る

○鬼こもる其黒塚は名のみにて

人のこゝろやすみかなるらん

領主丹羽加州侯采地十萬石、城は右の方に有り、町中には八幡の社あり、程なく正法寺村杉田に至り薬師堂へ詣し本宮に達す、繁昌の町にして入口に石雲寺と云ふ禪刹あり、間もなく新井田町、此處古戰場にして人取橋あり、誠の人取橋は是より西に少々入たちて有よし、此處こそは天正のいにしへ

大祖久山君(亘理城主伊達安房守成實三萬石)

貞山君(大守伊達陸奥守正宗)へ御力をあはせ、御心を一にして、風に櫛けつり、雨にかみあらひ給ひて、御かたきをたいらけ給ひし君々臣々の御いさほしの御名、今の世迄もとゝまりて、世おさまり國さかゆるに、今平坦の道さへ行なやむこと其おこたりの罪さり所なく覺へたり、高倉川夫より高倉日和田の驛ゝ、此處に埋

骨地藏堂佐夜姫の像あり、淺香沼は日和田町うらにあり、今は田圃となりて名のみ殘れり、左の方に淺香山あり

○さえかへる春の日數の淺香山
かけさへくもる山の井の水

福原の驛を過き、久保田と云所あり、夫より郡山入口二丁計り東窪田川に沿ふて義士伊藤肥前の墓あり、一株の柳の下に碑あり、文字落剝して不詳といへとも、義士の英名末世に朽す

○つかへてし誠の道のいさほしは
朽せて殘る石ふみの跡

郡山に宿す、客舍海老屋治右衛門、風雅の志あり、談話數刻に及ひ書畫帖等を出し各詩歌を染筆す、行程八里。

二十日天氣吉

明半時出立、小原田秀の山を過き笹川に至り十幸内と云處あり、此邊常州府中領ゝ、程なく越後高田領なり、滑川橋あり、下宿といふを過て、次賀川ゝ、右の方入口に大職冠鎌足明神の社あり、此處より白川領にして繁昌の驛也、町の左に長錄寺といふ寺有り、いにしへ二階堂の城址ゝといへり、笠石の驛に至る、驛中に常松何かしとて保命酒を商へり、裏に池あり築山等都て風流を盡せり、久來石の宿を過き、矢吹に至り、新田、大和久、踏瀬、大田川の驛を過き右の方に、石の地藏あり、むかし仙臺左五平に切られしと云ひ傳へり、小田川を過き泉田村あり、根田を過き、白川に達す、領主安倍飛州侯采邑十萬石、城は驛の右に有り繁昌の城下ゝ、旅宿村上屋傳右衛門、行程九里。

二十一日天氣吉少々風吹

明半時出宿、白川を過て、かはこ村といふ有り、白坂に至り驛を過て、右脇に境明神の兩社あり、玉津島明神を勸請すといへり、奥州下野の界なり、白川の關此邊をいへり

○旅衣かすみの袂ゆたかにて
越てもうれし白川の關

寄居高瀬峯岸抔いふ村々を過て、芦野に至る、此處御旗元芦野健藏殿領所なり、驛の入口右脇に溫泉の宮有と、傍に遊行柳の名木、芭蕉翁の碑あり、柳は植繼しと見へて若木たり

○今も其名にあふむかし契りおきて
しみつにむすふ青柳の糸

驛を過て寺岡村此邊黒羽領と、越堀迄の間二十三坂あり、坂より富嶽を望といへり、然れとも此日雲霞朦朧として見る事を得す、

越堀驛右の方那次野に續き、曠々たる野原と、越堀を過て中川といふあり、川を過て、綿掛の驛に達し宿す、夜に入り大雨旅宿佐野屋平左衞門、行程八里。

二十二日天氣晴明夜に入少々雪降

明半前出宿、練貫一ノ澤深田上ノ敷抔いふ所を過き、大田原の驛に着す、此處大田原飛州侯領所、祿地一萬三千石、町の左に居館あり、緑陰子永田道を江都に取、利定脩亮日光に至る故再會を期し此處にて別れ、是より澤村の驛迄那次の原にて曠々たる野原と、（近衞天皇久壽二年勅三浦義純上總介廣常狩那須狐化石僧玄翁割其石甫止其害と原文傍に朱註せり）薄葉と云處を過てほうき川と云あり、作山驛川の水源なり、澤村に至り八重田の驛に達す、此邊佐倉領と、夫より高内玉入に至る、驛の右に鷄頂山と云あり、

一名高原山と云ふ、頗る高山ゝ、麓の里民鷄を畜ことを禁ず若畜時は必鳴事なしといへり、然れ共其所謂をしらず、芦塲村を過て、舟生に至る、此處より日光御神領ゝ、驛を過て結川と云あり、安久津の水源にして、諸材を筏にし江戸に出せり、大渡に至り宿す旅宿扇屋宇右衞門、道を取こと十二里。

二十三日曇晝より稍晴風吹

明六つ少々前出立、芹沼村を過て、今市に至る、此間に臺矢川と云あり、結川に落合へり、四つ時前、鉢石町和泉舍金右衞門の亭に着案内を乞て參詣す、抑國祖(稱德天皇神護元年僧勝道如始登下野國日光山と原文傍に朱註せり)東照宮御神廟の結構枚擧するに暇あらすといへとも、先其大概を算ふるに、鉢石町を過て左に下乘碑有り、次に朱塗の橋あり、山菅の蛇橋と云へり、平人渉る事を

許さす、御宮へ路次の左右諸侯の宿坊綿連たり、程なく右脇御宮樣御本坊左の方、將軍家御殿地、是は外構のみにて空地なり、石の大華表筑前福岡松平筑州侯御寄進、下の石壇を千人舁形と云て檜階なり、左の方に五重の塔、若州小濱酒井侯の御寄附ゝ、次に仁王門、正面に　東照大權現の額あり

後水尾院の御宸筆なり、左右に國々諸侯御寄進の燈籠數ふるに暇あらす右の方に三つの神庫あり、唐銅の鳥居に入、左の方に肥前佐賀鍋島侯御寄進の御手水石、傍に經藏有て一切經を安置す、其外神庫神厩善美を盡せり、次に陽明門是俗に所謂日暮御門ゝ、正面の額は、後陽成院の御宸筆なり、右の方に在處の南蠻鐵の燈籠は、本藩大守公元和年中の御寄進なり、朝鮮國より奉納の華鯨には、李恒か銘あさやかにきさめり、琉球より寄進の梵鐘鐘樓

皷樓は、美麗を盡せり、陽明門の結構極彩色にして、金銀をちりはめ、列仙の像或は龍虎、又は和漢の鳥獸草木を彫刻し、天井は古法眼元信、狩野探幽各雲龍の墨跡ゝ、表は左右の大臣、裏には風雷の二神を安す、右に神樂堂護摩堂あり、次に唐門ゝ、是紫檀黑檀等の唐木を以て、色々の樹木を刻す、御本社御拜殿の結構金銀珠玉をちりはめ、凡て善盡し美盡し筆端の及處にあらす、奥の院には常の參詣を許さす、右の方に百八間の廻廊あり、檜廊下と稱す、別當を大樂院といへり、院內頗る廣大ゝ、御社を下りて道を右に取、右の方傍に相輪塔あり、慈昭大師御建立なり、次に本地日光大權現の御社ゝ、鳥居の額は正一位日光大權現　嵯峨天皇の御宸筆なり、熊野新宮の社向は、右大將賴朝卿此御山に燈油料を寄附せられしにより、白骨を納めし處の堂塔あり、次に

三代將軍大猷院君の御神廟ゝ、二王門始御拜殿御內陣丸て、結構美麗言語に盡しかたし、然れともこれ又常に參詣を許さす、傍に別當あり、龍光院といへり、道を右に取事三四丁にして、御供水あり、甚淸淨なり、一丁斗にして役の行者堂、程なく瀧の尾の社ゝ、坂を下りて子種權現の祠あり、道を左に取御本社の後に至れは、臺矢川漲り流れ、右は巖石峨々として、古杉森々たり、飯盛杉の大木、手掛石の大石あり、程なく當山開山の聖道上人の開山堂、次に本宮の社、傍に三重の塔有り、是又　大守公の御寄進といへり、日光御神領壹萬三千石、當時奉行河野對馬守殿、櫻中備中守殿、本の道に至り、旅亭に戻り旅裝を束ね、今市に達す、宿の入口右の方に、熊野瀧の尾の社あり、同所に宿す、旅舍加登屋嘉助、行程六里。

○仰くそよ此東路に宮居して

あまねく四方にてらす光りを

二十四日天氣吉

明半頃出宿、森友三つ梨子といふを過て、左に御旅御殿地あり、間なく大津驛々、驛を出て五六丁にして、日光御社領宇津宮領との境なり、御神領路傍左右皆並杉にして、從四位下松平右衞門太夫正綱寄進と云碑あり、日光御山中の杉も皆御寄進の植立なるへし、山口、小池、松元、石名田の村々を過て、〇〇〇の驛に至る、宿を過て野澤寺内と云村あり、八つ半頃宇津宮に達す、町中左の方に、當國一の宮日光大明神の社あり、六七年以前廻錄の災有り、此度新に經營せり、御拜殿御本社結構善美を盡せり、右の方に神樂堂あり、社領五千石、國君より御寄附々といへり、當處にて永田生に再會す、綠陰子は今朝江都に赴しよしを聞けり、驛の右に城有り、甚

繁昌の城下にして、二本松白川等の比すへきにあらす、城主戸田山州侯采封七萬石、客舍加登屋利左衞門、行程八里。

二十五日天氣晴明

明半時出立宇津宮驛を東に下り奥州水戸街道の別れ道あり道を水戸通に取桑島に至る、川有り舟渡しにして是則ち鬼怒川々眞岡の宿に達す、眞岡木綿を産す、此處御勘定領所にして役所は驛の左に有り、三里程行きて野州常州の境々、大泉に至る、此處御旗本中根壹岐守殿領處なり、日光より今市邊都て春寒甚し、此邊に至て梅花半は開き格別春色を催す、田圃は大田原より此邊總てよろしからす、茂手木村を過て雨引に至る、入口に茶店あり、坂路八丁にして左右に櫻樹を數た植たり、右に鐘樓仁王門壹丁計り登り本堂々、正面に額有り、へたてなき誓ひを誰も仰くへし佛

の道や雨引の寺今出川公久卿御筆とあり、經營結構を盡せり、左の方に三重の塔あり、傍に別莊有りて庭前の構泉水等甚風流を盡せり、此處より總州結城關宿邊眼下に見眺望の地なり、別當雨引山樂法寺眞言宗と、當所に宿す、旅亭島田六左衞門當驛笠間領と、行程十一里半。

二十六日終日曇る

明半頃出立、道を取る事十丁程にして、大曾根と云所より左に別れ加波山に登る、坂路三十六丁にして絶頂に至り三社あり、第一に新宮別當圓鏡寺、次に中宮別當文珠院、此壹社は牛久領なり、本宮別當正道院新宮本宮の二社は笠間領と、祭る所の三社彌陀釋迦勢至の三尊と云ふ、詣し終て足尾山に至る、坂路上下四十二丁十一面觀世音を祭ると云へり、別當大岩寺寺は各麓に在り、坂を下り上曾根に至る、此處に石の鳥居有りて足尾大明神の額有り、是表口なり道を左に取坂路十八丁にして峯寺に至る、馬頭觀世音の堂あり高さ四丈程のかけ造りと、湯袋村に至り筑波山に登る、坂路五十四丁にして半腹より巖石峩々として古木森々たり、頗る幽寂にして雲霞袂より出、群鳥の囀りを脚下に聞、嶮難加波足尾の及處にあらす、絶頂を女體山といふ、十四五丁西にして一峰を男體山と稱し両社相對して鎭座せり、傍に安置する所の末社數ふるに暇あらす、本社は伊勢皇大神宮を祭れり、社領千五百石別當江戸音羽持院なり、絶頂より四面すれは東に水戸府中宍戸より木嵐鹿島銚子に及ひ、南は土浦牛久武の大都房總二州を遠望し、結城下妻關宿より黑髪高原の群岳を望み北は笠間烏山に至り、殊に駿の富嶽迄廻眸の內に鮮なりといへとも此日天

氣朦朧として眺望心に任せず、可惜の甚敷なり、両體の間より南へ下る事五十丁にして麓に至り觀音堂あり、入口に仁王門右に鐘樓少々登りて本堂と、大御堂と唱へ正面に額あり、筑波山此本堂者　征夷大將軍從一位左大臣家光公御再建なりと刻す、左に三重の塔都て堂の經營結構を盡せり、筑波町に宿す、旅亭瀬尾津右衞門、行程十里餘。

○筑波山このもかのものけむりにも
さかゆく民の世をや仰かん

二十七日曉八つ頃より雨降終日不止

明半時前出立筑波町を下り町出口に石の華表有り、日本開闢筑波神社と云ふ額あり、北條の驛に至る、此邊より百姓農産を勵むと見へて田圃の手入よろし、尤地性野州よりは格別に宜しくみ

へたり、小田藤澤の驛を過て水戸通本街道に出たり、眞鍋といへる町有り、二三丁にして土浦城下に達す、諸方よりの舟着にして賑へり、城は町の右に有り、城主土屋采女侯采地九萬八千石、旅宿松屋庄兵衞道を取る事五里。

二十八日曇る八つ頃より晴る

明半時當所より舟を雇出帆、左に牛渡右に木原江戸等の浦々を過海路七里にして馬渡しといへる處に着船し、陸を行事二十八丁にして阿波大杉の神社へ詣す、社前に町有て石の華表々、本社拜殿頗る結構を盡せり、正面に大杉殿の額あり、左に神樂堂護摩堂別當天台宗にして龍華山安穩寺といへり、川岸へ戻り間もなく出帆す、天氣快晴にして吟望に堪たり、此浦を霞の浦といふ

○舟出して波のうらゝかみるめより

霞の浦の名にや立けん

舟を漕事二里計にして浮島といふ處に至り、既に暮に及、天氣又曇、俄にもや、四面に掩ひ行先を失ひ、壹里程も行しと思ひしに思すも元の浮島に戻り、水主色々心力を盡せとも方角を失ひ、迚も舟を漕事叶はす、辛苦して此夜は浮島に舟を寄せ舟中にて夜を明す。

○磯枕身をうき島にうき寢して

よる屋もなみの哀れをそ添ふ

二十九日曉八つ頃より雨降追々大雨終日不止

夜の明るを待出舟し、舟路一里にして牛堀へ着舟し風雨にて船を漕事不叶當所に止宿す、旅亭松屋源八風雅を好み、千種様に入門し和歌を嗜む、夜に入談話時を移す。

三月朔日丙辰雨晴八つ過より又雨降

明六つ時少々過出帆し、舟路一里にして潮來（イタコ）に至る、此處舟着にして、家數七百軒程繁昌の處之、二里にして當國一ノ宮蘆島に達す、川岸を大舟戸と云川中に一ノ鳥居あり、陸を行事十丁餘にして町あり、家つつきに左右に御師の居宅あり、二ノ鳥居仁王門御社は拜殿本社美麗を盡さすといへとも、古社にして神さび神威晃々たり、本社の後に神木の大杉あり、左に鹿島三社の御甲冑を神庫に納てあり、三四丁左へ入要石高まか原、末なし川等あり

○頼もしなかたきためしの要石

うこかぬ御代の神の誓ひは

御社領二千石大宮司を、花輪右衛門と云へり、大舟戸へ戻り、息抔の社を遙拜し津の宮へ着船す、此邊を香取の浦といへり

○漕來にし波わけ衣うちしめる
かとりの浦の春雨のそら

川岸に鳥居あり、陸地十八丁にして、總州一ノ宮香取大明神々、二の鳥居三の華表、次に隨身門左に神樂堂拜殿本社甚よろし、御社領千石餘大宮司香取内膳、社前の町を香取町と云西端に觀音堂五重の塔有り、當所に宿す、旅宿手島屋義右衞門、行程海陸九里半。

二日天氣曇

明六つ時出立、佐原に至る、御旗本津田鐵太郎殿領處にして、屋並よろしく甚繁昌の驛なり、岩ケ崎森戸小杉大和田の村々を過て高岡に至る、井上筑州侯領所采邑壹萬石、右の方に居館あり、深田村を過て、滑河の驛に至る、町入口觀音堂あり、仁王門右に鐘樓本堂天井は狩野○信の雲龍の畫、左右は狩野柳元の筆にして乙頻

伽陵の畫々、別當滑河山龍正院といへり、磯邊荒海と云に至る田安樣御領所々成田に達す、町入口に石の鳥居あり、成田町旅店軒をならべ甚賑へり、仁王門裏には廣目毘沙門の二天を安置す、正面に成田山の額有り安井門主大僧正の筆とあり、大堂大伽藍にして結構を盡せり、鐘樓經藏三重の塔美麗耳目を驚かす、傍に市川團十郎寄附の繪馬堂あり、石の燈籠玉垣池水鉢繪馬等に至る迄江府を始め諸國よりの寄進算ふるに暇あらす、本堂の後へ少々登り、奥の院岩屋あり、左に佛堂右に本地清瀧大權現、妙現を相殿に祭る、常に參詣群集し信心渴仰あり、別當新勝院といへり、酒々井の驛に至り宿を出て清光寺と云御朱院寺あり、門前に櫻の古樹あり、神君御成の節御尊眸にかゝり、故に枝葉を折取事を禁するの制札を立たり、佐倉の城下に達す、城主堀田備中侯采封十

萬石、城は左の方に在り、大手構等も甚麁末にして城下もよろしからす、二本松白河等に及はす、驛を出て駿の富嶽を見る夕陽に映し頗る眺望に堪へたり、碓井を過て、大和田に至る、町入口に印幡沼御普請の跡あり、沼の水を南海へ掘落すの結構なり、地を掘ること低き所一二丈より高き所九丈十丈に及ひ土地の高低に依て淺深あり、夫役幾萬人と云事をしらす、當驛に宿す、旅亭東屋五兵衞、行程十六里。

○待わひて見てそ驚く富士の根に
高くそ津もる世々の白雪

三日天氣晴明

明六つ時出宿し舟橋の驛に至る、入口に舟橋明神の社あり、大社なり、左は上總街道、右は八幡市川に至る、驛を出て一丁計にして、

往昔日本武尊御着岸の湊の舊跡あり行德に至る、左海邊にして多く鹽燒を業とす、行德の宿より舟を雇乘船し、舟路三里にして小網町に着船し、馬喰町二丁目に止宿す、旅舍藤屋嘉平行程六里。

四日天氣晴明、處々遊歷す、江都は諸人の知る所なれは記さす。

五日天氣曇る、阿部吉太郎來訪す、同道にて佐藤嘉源治を訪、色々饗應あり、綠蔭子嘉源治の亭に止宿に依て再會し、同晩永田生富澤町に止宿の由にて旅宿へ來訪す。

六日朝より雨降終日止す。

七日天氣吉所々遊覽す。

八日天氣晴明、同斷宍戶賴母來訪す、阿部氏も來る。

九日天氣吉遊歷す。

十日終日細雨、宍戶氏阿部氏來訪す、曉七つ頃芝口一丁目より出

火四五軒燒失。

十一日四つ頃より快晴、八つ半頃雷鳴二三聲雨降間もなく晴。

十二日天氣快晴、所々遊覽、飛鳥山に至る、櫻花一兩日の內に開敷の有樣なり。

○咲ぬまはあすも問ひみん飛鳥山

身のをこたりを花にまかせて

同晩阿部氏旅宿へ來り一同漫遊の約をなす。

十三日天氣朝の間曇四つ頃より快晴夜に入雨降所々遊覽。

十四日天氣朝の間曇近々晴

同日五つ時旅裝を束ね出宿、利定一同佐藤嘉源治役所に至り、色々饗應あり、綠蔭子始利定阿部永田一同出立、芝泉岳寺に達す義士の碑あり、廟所に義士の像四五輩を安置す、先年詣せし折は、營

無之處四五年前に經營すといへり、御殿山に至り、品川の驛を過海晏寺に詣す、境內楓數株あり、鮫洲鈴ケ森を過大森に至る、右脇の茶店に庭前梅數百株ありて東都梅屋敷に比すべし、むきはら細工を產す、此邊左に安房上總を見て頗る絕景々々、六鄕の渡しに至る、玉川の下流にして川上を矢口の渡しと云へり、新田明神の社あり、(延文三年十月江戶遠江守誘殺新田義興於武州矢口渡崇義興靈新田明神と原文に朱註せり)川崎驛入口より道を左に取、十八丁にして大師河原に至る、伽藍廣大にして結構を盡せり、別當平間寺眞言宗にして寺領七千石此邊都て梨子を產す、川崎に戻り宿す、客舍朝田武右衛門行程六里。

十五日天氣晴明

明半時出立女夫橋、八丁なはて、市場鶴見橋をわたり新宿かたは

村に至り右の方に浦島の古跡あり、淳和天皇（人皇五十三）勅願所古跡と云標石あり、右の方に碑銘あり、天長二乙卯より元文五庚申に至て、九百十四年龍宮に遊事三百四十餘年と有り、文字磨滅して詳ならす、（雄略天皇二十二年秋七月丹波水江浦島子遊蓬萊山淳和天皇天長二年歸于丹波古郷と原文に朱註せり）神奈川に達す、驛を過て輕井澤といふあり、道の右脇に富士の人穴あり、然れとも建久年中仁田忠常の入りし人穴は、富士の麓にあるよし、疑ふらくは此所の富士の人穴妄説なるへし。此邊都て左に海面を見眺望の地なり、程ケ谷の驛に達す、町中より道を左に取、金澤に至る、程ケ谷より三里にして能見堂といへるあり、山水の奇景神妙にして、金澤八景廻眸の中に鮮なり、故に能見堂の名を得たりと見へたり、堂前に一の庵ありて、三星亭と稱す、輪王寺一品親王近衛大府

公紀伊亞相郷御駕をとゞめ給ふ所といへり、傍に松一株ありむかし巨勢金岡此地の風光を寫さんとして眞妙心にまかせず筆を投ず、故に筆捨松といふよしなり

○うつし繪の筆捨てこそ中々に
畫ぬ詠めの名を殘しけれ

此所より六浦稱名寺への道あり、標石を立たり、金澤に至る米倉丹後侯の領所にして祿地一萬二千石、町を出て右脇に居館あり、間もなく武藏相模の境なり、朝比奈切通しを過て、鎌倉に至る、雪の下入口右脇に右大將賴朝卿の廟あり、（治承四年冬十二月造新館鎌倉と原文に朱註せり）間もなく鶴ケ岡に達す、門前町中央に一段高き處檀かつうと云て、二位尼公御寄附と云へり、石の華表左右に池あり、右に辨天の祠、左に四つの小島あり、中門を過て正

面に神樂堂、左に不動明王五大尊の乘給ふところの手前膝を屈めし事勳功記等に見へたり、今尚かくのことし、前の石階左の方に惡(?)禪師公曉實朝將軍を殺せし時、隱れ居りし銀杏の大樹今尚存してあり、側に經藏右に若宮の社、源賴義の建立にして康平(文治二年夏)五年(四月)靜女舞樂を奏せし處之、側に大日堂鐘樓、鐘の銘は正德四年二月日とあり、後に柳の古木ありて、蛇柳と稱す、一度枯れしところ、實朝卿「千年ふる鶴ヶ岡邊の柳はら青みにけりな春のしるへに」といふ和歌を詠し再ひ葉を生すといへり、境內東の方に當て賴朝卿屋形の跡あり、東御門村西御門村唐門口抔いへる地名も鎌倉繁榮の古跡と見へたり、少々坂を上りて隨臣門正間に八幡宮の額あり、(後冷泉院康平六年秋八月源賴義草創鶴岡八幡宮と原文に朱註せり)拜殿本社廻廊結構の經營にして神威晃々たり、

左に賴朝の社、丸山稻荷の祠あり、別當大場了賢神官大伴左衞門社領三千五百石、社の左より五丁計にして建長寺之、是鎌倉五山の其一なり、遠門を過て山門に寧一山の墨跡にて建長興國禪寺の額あり、(建長五年冬十一月北條時賴建建長寺以宋蘭溪爲開山弘安元年寂號大覺禪師と原文に朱註せり)本堂敷？左の方は巖辨天の社あり、寺領五百石三丁計西に尼寺有り、間もなく圓覺寺に至る、(弘安五年建圓覺寺以宋祖元爲開基と原文に朱註せり)是亦五山の一之、山門に圓覺高勝禪寺の額有り、花園院の御宸筆なり、(鎌倉五山、建長寺、圓覺寺、壽福寺、淨智寺、淨妙寺と原文に朱註せり)寺領六百五十石各最古刹なり、夫より扇ヶ谷に至る、十六井は海藏寺境內にあり、左に當て、景淸岩屋の窄道の傍に、底拔の井、二丁程戻りて尼寺あり、水戶黃門公御屋布にして五百石の御寄附

へ、傍に壽福寺と云寺あり寺内に、實朝卿の御廟あり、北に當て大塔宮土の窄、星月夜の井、巖の不動巡見終て宿す、大澤仙助行程十三里半。

○星月夜霞に曇る影なから
むかしゆかしき鎌倉の山

○仰け猶千とせをよはふ鶴ケ岡
松ふく風も萬代の聲

十六日天氣曇夜に入雨降
明半頃出立、鶴ケ岡一の鳥居を過て、道を右に取長谷寺に至るところの路傍右の方に廣德寺といふ寺有、寺内に大佛あり、長谷觀世音に詣て、七里ケ濱に至る、路傍に日蓮上人袈裟かけ松あり、鎌倉より十八丁にして七里ケ濱なり、腰、越、迄、の、間、四、十、二、丁、の、所、汀、

道、六、丁、壹、里、の、古、風、に、依、て、七、里、ケ、濱、といふ、左に稻村ケ崎といふ所あり、新田義貞龍神に祈誓し波濤を萬里の外にしりそけ、千葉の大軍を破りし事人の知る處ゝ、此邊古戰場にして、今も農民刀劍の類を掘出す事ありといへり、腰越に至り道を左に取(文治元年夏五月義經以宗盛父子赴鎌倉賴朝信景時讒止腰越不容と原文に朱註せり)江、の、島ゝ茶店都て賑ひ庖丁尤よろし、様々の貝細工をも產す、辨才天下ノ宮本社岩窟と三社ゝ、岩屋の辨天は則奥の院にして、下ノ宮より山を下り汀に出乾に當つて巖窟あり、入口より奥まて二丁二間左右に諸の神佛を安置し燭を取て内に入るゝ、岩屋を龍窟とも稱し、左右屛風の如く、身を潛て中に入誠に舌を巻くの靈場なり、本尊は欽明帝十三年涌出し天明乙己に至て千二百六十一年、別當金龜山江島寺岩本院山上より望めは

左は相の三崎豆のいらこ崎より大島八丈島一眸にして駿の富嶽相の箱根大山まて鮮かに、無双の奇観たりといへとも雲霞朦朧として眺望心にまかせす

○折しもあれ霞の衣立かさね

入江の島もさたかには見す

夫より藤澤の驛に出る路坊右の方に西行戻しの松あり、藤澤宿中程に時宗の本山藤澤山清淨光寺山門に登る、靈飛といへる額仁王門に藤澤山の額有り、南堂廣大にして結構々、右に小栗堂左に觀音堂境内坊舎多し、驛を出一里にして四つ谷と云ふ所に大山への道あり、鳥居に大山石尊大權現の額あり、夫より一ノ宮を過て川有り、田村川といふ舟渡しにして馬入川の水源々、田村に達し宿す、旅舎松屋與左衞門行程六里半。

十七日雨降四つ頃より大嵐八つ頃雨止

五つ頃出立、伊勢原を過て子安に至る、此所に銅金（カラカナ）の華表ありて大山寺の額を掛たり、是より前不動尊まて坂路三十丁左右皆御師の家軒をならへたり、右に良辨の瀧、良辨杉種々奇石等あり、此處より坂路十八丁にして奥の不動なり、此間別（わけ）て嶮岨にして古木繁茂して朦密なり、山門次に二王門本堂の普請甚よろし、別當雨降山大山寺眞言宗なり、本堂の後より石尊大權現への道有り、六月二十七日より七月十七日迄の外參詣を許さす、石尊への社領百五十石、此所より七八丁登り絶頂にして、海面を見渡し武相の二州眼下に鮮々といへとも雨後陰々として眺望心にまかせす、二十六丁下り、簑毛に至る、此所京師より參詣の輩小田原より、入るの道路にして是又左右に御師の家有り、當所本大坊に宿す

行程五里半。

十八日終日雨降

明少々過出宿、十八丁にして道を右に取田原高山松田を過て川あり丸木川といへり、關本に達す、宿の中程より八丁程左に入、道に大權現々、黒門あり間も無く仁王門、東海法窟の額在り、坂路二十八丁にして社や宮殿の彫物都て結構なりと云しか、過りて天保十一年燒失し當時假宮なり、別當最承寺といへり、塚原へ出、小田原に至る、驛の右に城有り(天正十八年秀吉陷小田原城と原文に朱註せり)城主大久保加州侯采地十二萬三千石城下甚よろし中程右の方に虎屋といふ藥店ありて頂透香と云ふ藥を商へり、ウイロウとて世に名高し、宿を出て左に石橋山の舊跡有り、(治承四年賴朝相州石橋山入椙山窟臥木と原文に朱註せり)湯本に至

り宿す、箱根七湯の其一々、旅亭福住九藏道を取事十二里半。

十九日雨降晝より止曇る

五つ半頃出宿、すくも澤忍の瀧より石畑なと云所あり、此所より芦の湯への道あり、此邊より別て嶮難にして、猿すへり銚子の口絶頂に至ては、四面山又山にして雲をふむの俤あり(延暦二十一年廢相州足柄路開筥根路と原文に朱註せり)

○箱根山雲ふむ峰の雨のそら

袖のしつくも谷川の水

右は名にあふ箱根の湖水にして、箱根權現の鳥居あり、四五丁右に入て、權現の社なり、左右に駒形愛染の社あり、右に鐘塔あり、鐘の銘は永仁二年二月五日、坂の脇に曾我兄弟の祠入口、左脇に釜二つあり、右大將賴朝富士捲狩の陣釜といへり、文永五年十一月

十二日と銘あり、別當金剛院東福寺寺領二百石、洛陽御室よりの御朱印寺といへり、右に賽の河原、是より八丁にして御關所々、小田原大久保侯より勤番々、箱根の驛に至る、此所相模伊豆の境なり、むかふ坂かた石坂風こし敷此所晴日には風光よろしといへり、かふと石石割山中茶屋長坂大しくれ三つ谷一ノ山塚原初音ケ原等を過て河原町々、此所まて坂路を下る事三里廿八丁にして是より三島々、入口右脇に當國一ノ宮三島大明神(光仁天皇寶龜十年三島大明神自豫州遷伊豆國と原文に朱註せり)の社あり、石の鳥居を入て(池あり、次に二王門二の鳥居を過て隨臣門、左に三重の塔拜殿本社結構にして頗る大社々、箱根の坂路上下誠に險岨殊に雨後路次至つてあしく疲勞に堪たり、旅宿佐藤善藏行程六里廿八丁。

二十日終日雨降

明少々前出立、驛より五丁計にして伊豆駿河の境なり、駿河新宿貴瀬川(治承四年源義經自奥州到黄瀬川謁頼朝と原文に朱註せり)東に當て長澤村八幡の社あり、此社内にて頼朝義經對面の舊地々、石田二た屋此邊を富士隱れといふ、地形低くして愛鷹山に遮られて、富士見得す、故に名とす、山王村車返といふを過て沼津に至る、入口に城あり、前に黄瀬川の流れあり、天守巍然として要害よろし、城主水野羽州侯祿地五萬石驛を出て、左を千本松原といふ六代御前(平維盛之男也文治元年六月宥殺刑と原文に朱註せり)の石塔あり、小すは、松永三本松、大すか此邊都て人家續にして、原に至る左に當て富士足柄の間に横走の關と云あり、むかしの官道々といへり、足柄山の麓に富士の人穴あるよし々、

建久三年六月三日仁田四郎忠常人穴に入し事人口に膾炙す(建仁三年六月和田平太胤長入豆州伊東崎之洞仁田四郎忠常入富士之巖穴と原文に朱註せり)原を過て左の方浮島ケ原、柏原檜原元吉原四つ谷此間の坂を手兒の呼坂といふ、川井の橋を過て、吉原ゝ此邊富士の正面にして、富岳の觀此所にありといへとも、此日霖雨頻にして麓まて陰々として、更に見る事を得す遺憾云計りなし(孝靈天皇五年駿州始富士山見同七十二年秦徐福來朝と原文に朱註せり)

○旅衣待來し富士のはれまなき
すそ野の雨やうき島か原

吉原を過て、右の方久野と云所に淺間の社幷に曾我兄弟の禿倉ありて世人曾我八幡と云、今も敵討の者信仰し靈應ありと云傳ふ、(建久四年夏五月曾我十郎祐成同五郎時致因復讎殺工藤祐經と原文に朱註せり)福泉寺と云ふ寺に曾我兄弟の石塔あり、苔深く文字落剝して見へす、寺に牌ありて十郎祐成(年二十二歳)を高崇院殿峰嵩良雪五郎時致(年二十歳)を鷹岳院殿士山良富とあるよし、連日の雨天にて富士川の渉り覺束なき故實地を踏すといへとも聞及ふ所を記す、新田青島うるい川河原宿元市場へい垣松岡を過て、藤川なり舟渡しにして急流なり

○おしめともよとむ瀬もなきふし川の
流れてはやき月日なりけり

岩淵中の鄉三軒屋を過て左を吹上の濱といふ

○雲たちてみるめなきさの浦さひし
あらしは浪を吹上の濱

蒲原に至る、左は海面にして、川田村中村片濱せき澤神澤凡て家つゝきにして、由井に達し宿す、旅宿府中屋仙助行程十里餘。

二十一日朝より雨降追々大雨

朝五つ頃出立、蒲原より江尻迄の海邊三穗の入江にして田子の浦といふ、今宿寺尾くら澤油井川を過て薩埵峠へ、路の左脇に望嶽亭といふ茶店あり、此邊都て絶景へ、湧津川といふあり、かち渉りなり、川を過て興津に至る、驛を出て程なく金剛山清見寺へ、山門に東海名區の額あり、左に諸佛堂右に鐘樓、本堂には興國といふ額あり、朝鮮正使翠屏の書とあり、濟力にして寺領二百五十石、庭前より海面邈々として三穗の松原を眺望す、清見ケ關(承平三年平將門之亂藤原忠文爲征夷大將向東海道途過駿州清見關時軍監清原滋藤吟杜荷鶴所謂漁舟火影寒燒浪驛路夜過山兩勺忠

文感軍中而不忘文事と原文に朱註せり)の跡此邊にして、東海第一の奇觀此地に有といへとも、此日も陰雨冥々として眞景を失ふ事旅中遺恨の第一なり、一首を寺中に殘す

彌生末つかた、清見寺に至り見れは、峯松はみとりの色をまし、浮天の波は雲を汀の傍にて、沖こく舟波ゆく鷗、これか耳目の感ふたつなから此所にありとおほへて

○等閑のみるめやはある清見潟

浪の關守よしとめすとも

寺僧色々叮嚀にして、裏庭に至りみれは泉水のかまひ甚風流なり、是よりはた打川、横すかいはら川を越て、すゝき島逢染川かつたいか原を過、江尻に至る連日の雨天にて安倍川のわたり不叶由を聞此所に宿す、客舍大竹屋平七道を取事三里半。

二十二日雨晴曇る
明半頃出宿、驛を出て道を左に取、清水の湊に至る、民屋千軒餘にして三穗への舟路なり、五六丁行て觀富山龍華寺といふ日宗の寺あり、庭前に蘇鐵あり、大なる物本の圍み一丈四五尺長サ貳丈餘枝五十本餘大小數十本あり、庭前より三保富嶽を觀し、絶景々、開山日嚴上人俗稱は里見安房守家臣正木大膳と云紀州公水戸公の御母公阿滿の方の御甥なり、故に御兩君より種々御寄附ありといへり、有渡の濱の海邊を過て、久能山に至る、入口に下馬札あり、初の御門にて參詣の輩の姓名出所を糺し頗る嚴重なり、麓より坂路十五丁計にして隨臣門々、後水尾院の御宸筆にして東照大權現の額有り、次に唐金の鳥居、左に五重の塔右に鐘樓神庫左右に御譜代の諸侯御旗本衆方奉納の燈籠數を盡せり、唐門

を過て御拜殿御本社奥の院は御本社の二丁計後にして、御尊骸を納め奉りし所々、御普請の美麗は日光に及すといへとも、神君の御眞廟にして神威頗る嚴重なり、右に藥師堂あり、凡て久能山の坂路巍々として險しく西に遠江崎東に伊豆の伊郎崎、正面は所謂遠江灘七十五里の大洋滄々として頗る勝境なり、別當德恩院御神領三千石旗元榊原殿守護職にして、役人は小田原侯吉田侯より替る〳〵勤番あり、大都よりも與力八騎同心三十人定番すといへり、此所より三里にして府中に至る、城下甚繁榮にして紙眞蘆久保茶竹細工等を產す、御城は右の方にあり、御城番小豆原豐後殿五丁程西に當て當國一ノ宮淺間の社々、石の大華表仁王門次に隨臣門々、拜殿の高サ十三間四尺四方破風二階拜殿左右の廻廊六十四間、御城番の御旗元衆方奉納の繪馬數を盡せり、

中央に能舞臺あり御本社淺間大權現總社拜殿と、四面花鳥の彫物は信州諏訪館川和四郎の作にして、結構善美を盡せり、左の方に摩利支天の社名古屋大明神の社何れも極彩色にして、甚美麗の經營と、頂上は奥の院にして、此所いはゆるしつはた山にして、梅樹數株あり、西南に木からしの杜、安倍川に添ふて見ゆ。

○梅さくら花のにしきをたてぬきに
あやおり出るしつはたの山

○花の比なれは美とりの春たにも
その名はつらき木からしの杜

社領二千六百石、別當惣仁院神主新宮將監總社大藏府中の城下を過て、安倍川かちわたりと鞠子に達す入口にまりこ川あり、元宿矢の澤を過て、六丁左に連歌師宗長の古跡あり、是より宇津の

や峠にして上下十六丁、茶店の側より道を左に取て、蔦の細道と、岡部の宿より十八丁手前鼻取地藏堂の側に出る、宇津の谷の坂路さして嶮難にもあらす

○草枕うきかりふしも跡の夢
けふはうつつの宇津の山こえ

岡部に達し宿す、旅亭龜甲屋久平行程十里。

廿三日曇八つ半頃より雨降
五つ頃出立、宿を出て朝いな川横うち鬼島三つ森八幡鐙ケ淵を過て、左に田中の城見ゆる、藤枝に達す、町中左の方に田中の大手あり、城主本田豐州侯采封四萬石驛を出て瀨戸川あり、かちわたしと、志多水上青島三軒屋栃山等を過て島田の驛なり、大井川過る。十七日より川留にて、當所に宿す、旅舍尾張屋嘉三郎道を取事

四里。

廿四日朝より雨降終日不止

同朝大井川相明通行の段註進有之、本藩御用宿紀國屋藤兵衞前日より色々叮嚀にして案内の者旅宿へ遣し明半頃出宿島田、河原へ至る、河原表渺々として海道第一の大河、駿遠の境なり、川の流れ二筋にして島田の方へ付、流れ水底深くして川渉し不叶、橋をわたせり薩州公の御道行と、過る十七日よりの川留に付、肥前五島侯大阪御番の御旗元衆其他諸國の商人風騒の雅客都て島田へ逼留の輩一同に河原一面に押出、金谷の驛には十八日より薩州侯御止宿其他諸家の藩中往來の旅舍是亦一同出張故川の両岸雲霞の如く先道具弓鐵砲鎗長刀馬駕籠長持面々の荷印思ひ〳〵に押立各前後を爭川渡しの人足は賃錢の多少をいと

み誠に古今の見物なり、(校者曰大井川川留の當時の光景宛として目前に見るか如し、大井川の川留とはよくきゝしことなるも、今茲に祖君のまのあたりの逢事を記述しつゝ當時を偲ひて其の實景眞に眼前に髣髴たり)晝頃川を渡り、金谷の驛に至り宿を出てすはの原に至る、此所に矢の根鍛冶ありて製す、菊川に達す、此地は往昔中納言家行卿昔南陽縣之菊水下流を汲て齡を延、今東海道の菊川西岸に宿して命を亡すと宿の障子に書置しといへり、小夜の中山に至る、? 無間の鐘は一里半程右の山中に埋ありといへり、夜泣石は十二三丁程下り坂中にあり

○わけのぼる小夜の中山くるしきも

こえて名殘のおしまれそする

日坂に達し、驛を出て、路傍左に譽田八幡の社有り、娘の田鼻の畑

鹽井川原を過て、右に大燈籠權現への鳥居あり、加茂すは村鳴瀧を過て、掛川の城下に至る、町中右に大手あり、城主太田備中侯采邑五萬石、當所に宿す、旅宿池田屋長右衞門行程四里半。

廿五日終日雨降

明半頃、出宿、城下を出十四五丁にして右に秋葉山への道あり、唐金の鳥居あり、此所にて緣陰子阿部氏は直に京師へ赴きしに依て再會を期し暇をなして相別れ、森町に至る屋並よろしき驛ゝ、三倉、一ノ瀨に至る、此間かちわたりの川多くして四十八瀨といへり、大田川の一河なれとも屈曲して如此し、下流は袋井見附の間に落るゝ、子ならやすを過て氣田川といふ舟渡しあり、戊亥に達す、此邊山々に松を植立諸材を澤山に出すと見へたり、田畠至て不足にして山谷隅々まて畑にして、土地はよろしからす、又茶

を產す、坂下に至り宿す、森町より坂路にして嶮難なり、旅宿高木屋安兵衞行程十二里半。

廿六日雨八ッ頃より止曇る

五ツ頃出立、秋葉山への坂路五丁にして、唐金の鳥居あり、金明嶺の額あり、二十九丁にして又華表あり、最勝關の額あり、四十七丁にして同鳥居に、護國嶺の額あり、五十丁にして仁王門秋葉寺の額を掛けたり、此間坂路左右古杉繁茂して甚朦密なり、右に經塔石階一丁斗にして、正面は觀世音ゝ、拜殿に淨聖殿と云額あり、右脇は正一位秋葉大權現の社ゝ、拜殿本社彫物等凡て善美を盡し結構ゝ、右に萬燈堂左は大登山秋葉寺曹洞宗にして寺中頗る廣大なり、火災鎭防の神にして諸國より信心渴仰の寄進等夥し、左に道を取坂路三十丁程下り、鳥居に金樹林の額あり、是京師より

參詣の道なり、麓に下り斗倉を過大川に至る、川あり天龍川の水源にして舟渉りなり、石打、熊神澤、大平に至る、此所遠江參河の境にして、此邊迄專ら杉を植立諸材を多く出せり、巢山に達し宿す、旅舍柏屋彦右衛門行程十二里。

廿七日天氣吉

明半時出立、大野の宿を過て川ありかち渡りなり、坂路三十丁程にして行者越といふ大難所あり、二丁の間膝を抱て登るか如し、麓より五十丁にして鳳來寺なり、本地峰の藥師左右に十二天童子を安置せり、前に鐘樓後に本宮左に三重の塔、右に大師堂元三堂夫より石階を登り

東照宮御靈屋にして左右に御譜代の諸侯寄進の燈籠あり、天臺眞言兩派にして、煙巖山勝岳院鳳來寺々內二十二坊兩學寮凡て

二十四坊々、寺領千五百石、坂路九丁下り二王門あり、麓を角谷と云て宿屋多し、瀧川の舟渡しを越て、新城に至る、菅沼織部正殿領所にして祿地八千石繁昌の町なり、然れとも田圃至て悪し、二里斗にして道を左に取豐川稻荷明神へ詣す、折節開扉にして近郡より老若袖をつらねて群集す、正面に觀音堂左に稻荷の社々、神樂堂諸佛堂結構の經營にして別當妙嚴寺、夫より道を右に取一里斗にして路傍右に當國一ノ宮砥鹿大明神の鳥居あり、此邊古の官道にして本野ヶ原といへり、御曲に達し宿す、旅亭銀杏屋伊左衛門道を取事十三里半。

廿八日天氣晴明

明六ツ少々過出宿、赤坂に至驛を出て中柴法藏寺を過て左に神君御身隱山といふあり、藤川に達す、宿を過て西尾領なり、間もな

く大岡紀伊侯領所にして右に居館あり、采地一萬石大平村、左に小豆坂古戰場にして三振太刀の高名此所なり、(天文十一年今川義元與織田信秀激戰於小豆坂七本鎗織田信秀織田造酒亟下方左近岡田助右衛門佐々木隼人佐々孫助中野又兵衛と原文に朱註せり)岡崎に達す、(天文十一年冬十二月大神君御誕生參州岡崎城と原文に朱註せり)城主本多上總侯采地五萬石城下甚繁榮す、城は左の方にして要害甚よろし、城下を出て矢矧の橋長さ、貳百八間にして海道第一の橋なり、東矢矧に至り右の方に淨瑠璃姫の古墳あり、西矢はき大濱を過て池鯉鮒より八丁程手前にして街道より五丁程右に入一堆の小高き丘に古杉六七株ありて八橋の古跡と、八橋山無量木といへり、本堂に紀州公の御筆通僊閣の額あり、八橋をわたせし古跡は本堂右の方の側にあり、

今に橋桂什物にして寺中に存せり、業平塚とて寺の後にあり(業平者阿保親王第五子正三位中納言行平之弟也幼時號曼陀羅丸體貌閑麗稱天下美男好和歌耽女色感情性放縱元慶四年爲左近衛中將業平引女子函他婦不遑數時人戲呼謂陰陽神今歲卒五十八と原文に朱註せり)

○むらさきのゆかりの色も夏艸の
むかし戀しき八橋の跡

池鯉府に至る、此處刈屋領なり、驛を出て右に池鯉鮒明神の社左に御茶屋と稱して御殿地あり、あいつま川八丁なはて今岡今川を過て境川橋あり是參河尾州の境なり、西北に當てあなふ村といふ有り、毎年六月朔日新米を國君へ献すといへり、落合村右に仙人塚といふあり、間もなく桶狹間の古戰場にして街道より一

丁斗左に今川義元主従戰死の場所あり、古杉の下に標石ありて今川上總介義元戰死の所と鐫す、明和八年十二月千代倉氏の建る所々、(永祿三年夏五月今川義元於桶狹間與信長相戰義元敗軍討死と原文に朱註せり)少し上に松井八郎戰死の所と云碑あり、其外士隊將戰死の所と刻るところの碑五ケ所にあり、有松に至る、家ことにしぼりを商へり、鳴海へも出せり、有松しぼり是なり鳴海に達し驛を出て田畑橋左右に鷲津丸根等の砦の跡あり、笠寺へと人家續にして山崎橋といふあり、八丁なはてを過て、宮に至り宿す、旅宿大津屋利吉行程十三里。

廿九日天氣晴明

明半時出宿、宮驛築出町といふ所に載斷橋と云あり、欄干に銘あり天正十八年六月十八日小田原陣中に於て堀尾金助十八歳に

て討死し、慈母哀憐の餘り追福のために架す、三十三年供養の規式法名等あり、此地は桑名へ七里の渡し又佐屋廻りの上下咽喉の所にして甚賑へり、左に道を取り熱田の社にして(白鳳十四年夏六月天武天皇病納艸薙劒於熱田社と原文に朱註せり)大華表あり、拜殿本社廻廊美麗は盡さすといへとも頗る大社にして神威をます、社領千石神主千秋出雲守社内より左へ出て、名古屋に至る此處にも大鳥居あり、町つつきにして名古屋城下に入、右に東御門跡あり、寺内廣大にして堂塔普請都て結構を盡せり、左に西門跡寺内普請東に劣りし事比すへきにあらす、若宮八幡の社あり、御城は右の方に巍然として藩中士以上常に次肩衣にて登城すとみへたり、城下の繁華大都の風にして商家甚よろし、大橋を渉り廓を出て左に一丁斗入粟手の杜の社あり、

○祈れともあはての杜の夕たすき
かけて甲斐なき身をいかにせん

十四五丁南上の中村に、豊臣秀吉公生誕の跡ありて、大閣山常泉寺とて日宗の寺あり、今に八月十八日豊太閤薨御の法莚ありて群集すといへり、又加藤清正出生の所も此南隣村下の中村と、氏神八幡宮を今に於て裔様より修補あるとなり、淺野蜂須賀其外尾州出生の古跡多きよしなり、道を取事二里斗にして鳳凰山甚目寺といふ寺あり、觀音を安置す、此所より三里にして津島に達す、是又繁榮の所にして一ノ鳥居樓門を過て拜殿、本社左右に彌五郎殿森居殿神樂堂繪馬堂無殘經營にして結構は盡さすといへとも是亦神威晃々たり、社領千三百石別當實相院大宮司堀田右馬太夫其外神職數多あり、尾州に入田圃大にひらけ悉く豊饒

の地なり、然れとも山林不足にして采薪の患有りとみへたり、佐屋に至り此所より乘船し船路三里にして中程に尾張勢州の境あり長嶋は左の方に當れり、桑名に達し宿す、旅亭京舍小平行程海陸十一里。

晦日天氣曇晝より雨降追々大雨、夜八つ頃雷聲あり
明六つ少々過出立、左に城あり、海面に築出し要害甚よろし、城主松平越中侯采封十一萬三千石、都鄙附會の城下にして頗る賑へり、左に春日の社あり城下を出て町屋川おふけ朝け川はつかいそ川を過て、四日市々、此所又繁昌の驛にして町中に四日市川あり、日永を過て追分に達す、京師伊勢路の道ありて、皇大神宮の鳥居幷に標石を立たり、道を伊勢路に取かはら田鈴鹿川、高岡を過て神邊に達す、領主本田伊豫侯祿地壹萬五千石玉垣を過て、白子

に至る、右に白子の觀音安産の靈驗ありといへり、境内に不斷櫻あり、上野に達し中井磯山小川を過て右に高田御門跡への道あり、中山町屋を過て、津に至る、江戸橋とふせい川あり、城主藤堂泉州侯采地三十二萬石餘、城下よろしく殊に長し、旅亭瓢簞屋惣助道を取事十三里。

四月朔日丙戌天氣四つ頃より快晴

○旅のそら霞の衣ぬきかへて

けふ卯の花のしらかさねせん

明六つ少々過出宿、たるみ高茶屋を過て雲津に至る、此所に雲出川あり、舟渡しなり、月本に達す、右に大和奈良への別れ道にして標石を立たり、少し行て左にわすれ井あり、六軒に至る、此所にも大和への別れ道あり松坂に達す、紀州公御領處にして繁昌の驛な

り、櫛田に至る、此所に櫛田川あり、舟渡しなり、明星か茶屋新茶屋を過て小俣に達す、驛中にて綠陰子阿部に逢へり、山田より戻り京師に赴くの由を云へり、離杯を採て互に無事を約し相別れ宮川の舟渡しを過て、山田（雄略天皇二十二年秋九月遷祠豐受大明神於勢州度會郡山田原と原文に朱註せり）に至り外宮豐受大神宮の御社や左右の末社かそふるに暇あらす、夫より山田町を過左右神宮軒をならへたり、町を過て合の山古市の遊里にして晝夜三絃の音絶る事なし此間五十丁にして宇治に達す、五十鈴川あり、橋を宇治橋といへり、伊勢路に至り六軒松坂の邊より殊に賑はしく、都鄙遠近の隔なく老幼男女貴となく賤となく詣人ひきもきらす、山田宇治の市居賑はしく實に天下豐饒の地なる事推して知るへし、井面神主の亭に着止宿す、行程十里餘。

二日五ツ頃より雷聲雨降書より快晴
同日朝飯後井面神官より案内を出し、内宮皇太神宮へ詣す、(垂仁天皇二十五年春三月建　天照太神社於勢州始立齋宮と原文に朱註せり)御社白木造にして結構を盡さすといへとも清淨にして、内外兩宮共に廿一年目毎に新に經營すといへり、本邦開闢宗廟の御神にして敬畏渇仰に堪へり

○汲てしれ御裳川のなかれまで
　内外の神にもれぬ惠みを

左右風の宮雨の宮を始末社數ふるに暇あらす、御神領三千石山田奉行太田志摩守殿、夫より天の岩戸へ詣す、誠の岩戸は、磯邊と、いへる所にして、此所は後年擬へ移せしよし、云、井面の亭へ戻る。
三日風吹

五ツ半時亭より案内を出し朝熊に詣す、宇治橋の東詰より道を右に取坂路五十丁斗にして六軒茶屋といふ有り、是より廿二丁にして朝熊ケ嶽なり、門前にて萬金丹を製しひさけり、二王門に朝熊岳の額あり、本堂を摩尼殿といへり、本尊虛空藏菩薩左右に諸佛堂三丁右に入て奥の院なり、付蠣殿の額あり、傍に富士見臺といふありて晴日には富士山を望といへり、別當勝峯山金剛寺社領百石六軒茶屋へ戻り、此所より道を右に取二見の浦に至る、海面二ツの岩頭へ注連をかけ晴天富士を觀し、世に普く圖するか如し、殊に駿遠參尾の浦々を遠望し頗る佳景ゝ

○伊勢の海ひろふかひある玉くしけ
　ふたみの浦のあかぬみるめは

是より行程百丁にして宇治へ戻る。

四日天氣晴明
明半時太神宮へ詣し亭へ戻り、正、神、主、従、三、位、荒、木、田、政、親、對、面、あり、滞、留、中、饗、應、頗る叮、嚀、に、して、慇、懃、に、堪、たり、五つ過暇を乞旅裝を束ねて出立、宮川迄案内を出し同所茶店にて饗應あり、松。坂。に至り宿す、中屋彦八道を取事六里半。
五日天氣晴明
明少々前出宿、月本迄戻り標石の所より道を左に取、雲津川をわたり久居に至る、領主藤堂佐渡侯采邑五萬三千石城下甚寂寥として邊鄙なり、三軒より長野に至る是より坂路五十丁の峠なり、併さして嶮難にあらす、絶頂伊勢伊賀の境なり、平松を過て、山田に至り宿す、客舎綿屋半平行程十二里半。
六日天氣晴明

明半時出立、上野に達す、域は町の左にして藤堂侯の持城なり、伊勢路奈良東海道附會の地にして賑へり、鴻(?)ケ原に至る川有舟渡しなり、十五丁斗にして伊賀山城の境なり、大河原を過て、笠置に達す、此處より乗船し木津川を下り三里にして木津に着船す、此間に山城大和の境あり、此邊多分牛にて荷物を運送す、木津より五十丁にして奈良に着す、町入口は佐保川あり、旅宿蒟蒻屋庄五郎道を取事川陸十一里半。
七日曇八ツ半頃より雨降
五ツ頃案内を乞て旅亭を出て奈良を見物す、所謂奈良舊都にして神社佛閣名跡枚擧するに暇あらすといへとも巡見する所の大概先東大寺に至る、聖武帝の御創造にして大門あり、景清門ともいへり、次に二王門夫より大佛堂へ、百間四方の廻廊にして世

に知る所の大伽藍にして大佛坐像長ケ五丈三尺(聖武天皇神龜十六年冬十一月大佛始成同十七年秋八月遷奈良と原文に朱註せり)東の方に大鐘あり重サ四萬八千九百斤、二月堂には觀音を安置す、傍に良、辨、杉、と云あり、三月堂四月堂各佛像を安す、脇に若狹、の、井、といふあり毎年二月十二日(校者註陰暦にて云へり)の夜一夜に若狹の國より水涌出すといへり、然れとも其いはれをしらす、北に當て三つ倉といふあり蘭。麝。待。(天正二年春三月信長奏往奈良東大寺截蘭奢待、明治十年二月九日聖上奈良大佛殿博覽場へ臨幸天覽後木戸内閣顧門香川宮内大亟を勅使トシテ正倉院ニアル蘭麝待を貳寸斗リ切斷持返ラセラル一名黄熟香織田信長壹寸八分切リシ後切リタルコトナカリシナリと原文に朱註せり)を收め置といへり、其外寶藏數多あり、南に八幡の社あり、

東大寺凡寺領千百石左に手向山三笠山あり、麓に三條小鍛冶宗近の末裔なりとて刀劍を製し商へり、三丁程南にして春日の社へ、山中鹿多く境内寄進する所の燈籠擧てかそへかたし、社は結構を盡さすといへとも神さひて神威を增すとおほへたり、僅南に若宮八幡の社あり、神主神塚出雲守社領二萬五千石、四五丁西にして氷室の宮あり、夫より興福寺に達す、(元明天皇和銅三年右大臣不比等建興福寺於奈良、敏達天皇八年冬十月新羅貢釋迦今在興福寺と原文に朱註せり)一乘院御門主にして境内頗る廣大へ、本堂七堂伽藍廻椽?)にして南大門の礎のみ殘れり、前に扇の芝と云ありて、毎年薪能興行あり、右の方に五重の塔、藥師堂花。松。と、云、名。木。有り、門前に猿澤の池、衣かけ柳、采女の宮、八重櫻等相並んて有り、境内左の方に西國札所南圓堂あり、(弘仁四年春正月藤

原朝臣冬嗣建南都興福寺南圓堂祈藤氏榮と原文に朱註せり)雲井坂は巽の方にあり、奈良奉行池田志摩守殿、客舍へ戻り、旅裝を束ね八ツ頃出立、道を右に取右の方に　聖武帝の陵あり、法華寺に、至る、此所古の皇居の跡といへり、寺領三百石西大寺に至る、是亦寺領三百石夫より八丁程西にして、菅原天神へ詣す、是菅公御生誕の舊跡にして、村名も菅原といへり、別當喜善寺招提寺に至る、道の傍に風來の池と云あり、招提寺に至る甚古刹にして寺領三百石、五丁程にして西の京に達す、右に五重の塔あり七堂伽藍享祿の兵燹に依て燒失すといへり、是又寺領三百石道を南に取郡山に至る、城主松平甲州侯采地十五萬石、右の方に城有り、城下甚賑へり、當所に宿す、旅亭花內屋忠兵衞道を取事三里。

八日天氣朝の間曇追々快晴

明半頃出宿、小泉に至る、領主片桐市正侯祿地一萬二千石、法隆寺に達す、聖德太子の御創造にして大伽藍なり、境內坊舍多く左に五重の塔峯の藥師堂寺領千石、夫より道を右に取龍田明神へ詣す(天武天皇白鳳四年龍田社於大和國勸請と原文に朱註せり)二丁程西の方龍田川両岸に紅葉あり

○龍田山千入の秋やいかならん
　そめし錦の折にあひなは

三室山は一丁斗南なり、龍田川の舟渡し越へて片岡山達摩寺(推古天皇二十一年皇太子見異人於和州片岡是達摩化身也と原文に朱註せり)に至り、二里斗南にして石光寺といふあり中將姫(光仁天皇寶龜六年夏四月中將姫寂和州禪林寺俗日當摩寺と原文に朱註せり)の古跡にして庭前に糸掛櫻染井後に二上ヶ嶽あり、

俗に染井寺といへり、當麻に達す、是又境内廣大なり、本堂の右の方に中將姫織殿間、左に大師手習の間、蓮糸の蔓陀羅額は後奈良院の勅額にして其外什物數品あり寺領三百石、折節開扉にして貴賤群集す、道を東に取高田八木を過て右の方に安。。滿。。の。。かく山。。あり、三輪に至る一の鳥居を過て左右旅舍茶店多し、坂を少々登り左に二本の杉右に玄賓僧都衣掛の杉、しるしの杉何れも古杉なり三輪明神へ詣す(崇神天皇十年改大和大神爲大三輪大神と原文に朱註せり)

○祈るその人の心のすくなれと
　立るしるしの三輪の神杉

社領百石社内より左に道を取、追分に至り宿す、郡山より此邊綿木綿を產す、生產を勵むとみへて民屋都てよろし、客舍角屋重治

郎行程十里。

九日天氣吉

同日明半頃出立、長谷寺(元正天皇養老五年造長谷觀音尊像聖武天皇神龜四年建長谷寺と原文に朱註せり)へ詣す、樓門より本堂迄坂路廊下續にして、左右坊舍連續せり、本堂廣大にして左に五重の塔あり、眞言宗にして寺領五百石

○法の華世々にひらけし駒瀨山
　聲も色ある曉のかね

追分へ戻り、櫻井を過て安倍文珠へ至り、夫より飛鳥明神へ詣す、境内に伊勢內外両宮を祭り置けり、鳥居の向に飛鳥川あり、橘寺に至る、聖德太子御誕生の舊跡といへり、岡寺(天智天皇二年依勅願建大和岡寺と原文に朱註せり)に詣て此所より坂路五十丁に

して、多武峯に至る、大職冠鎌足公の御廟所にして頗る結構を盡せり、左の方に十三重の塔あり、境内坊宇數多あり、別當天台宗にして竹林坊大僧正社領三千石、道を左に取、瀧の畑に至る西南の山上に高取の城みゆる、ちまた、上市を過て吉野川なり舟渡りして、左の方に、妹山あり、脊山は紀州にして、遙隔つといへり、一里にして吉野に至る、(正慶二年天皇遁洛建都吉野稱南朝と原文に朱註せり)坂路八丁左右皆櫻樹にして所謂一目千本の梢々、皆青葉にして、散殘りし一木の花あり

○いかにしておくれ來し身に殘りけん
むへ心ある花の一本

○若葉にも思ひやらるゝ吉野山
千本の花のさかりなるころ

唐金の大鳥居ありて、發心門の額は大師の御筆二王門を過て藏王權現の社々、正面に金峯山寺の額あり、別當を吉水院といへり、義經此山に潛行ありしに依て什物數々あり、(文治元年賴朝捕義經之妾靜於和州吉野山と原文に朱註せり)社領二千三百十六石東の方に子守勝手の社　後醍醐天皇の陵あり、奥の院は山上大峯にして此所より六里坂路誠に嶮難なるよし、修驗者萬行の靈場にして常の詣人も淨衣を着し群參引もきらす、當所に宿す、旅亭辰己屋長右衞門行程十里。

十日天氣吉四ツ頃より雨降
明半頃出宿、道を左に取五六丁にして路傍左の方に南朝の忠臣、村上彦四郎義光の墓、幷に、碑銘あり、六田に至り川わたしを過く長田(?)鵜野にかゝり五條に達す、當驛甚賑へり、夫より待乳峠に

至る、右に又た法眼筆捨山といふあり、さして景地にあらす、此所和州紀伊の境なり、橋本に至る、路傍に護國寺といふ寺あり、庭前に行基の植たまふと云松あり、枝葉枯槁すといへとも古松なり、豊太閤高野山御參詣の節御旅殿〻といへり、紀の川の舟渉しを過て、かむろ、河根を越神谷に至る此所茶店へ北室院より案内を出し置饗應あり、夫より高野山へ登山す、坂路五十丁にして山中松檜繁茂して朦密〻、其内不動坂とて傍に不動堂あり、八丁許の間甚嶮難なり、坂路を過て絶頂五十丁四面平坦なり、入口に女人堂といふ有りて此所より女人入るとを禁す、十八丁にして本藩宿坊北室院へ着す行程十三里。

十一日終日雨降不止

同朝役僧案内にて院内本堂へ詣し、左の方別殿にて本藩大守公

御代々御位牌を拜す、(嵯峨天皇弘仁七年夏六月釋空海開紀ス高野山承和二年春三月空海寂高野山天安元年冬十月贈大僧正昌泰二十二年謚弘法大師と原文に朱註せり)飯後案内を出し奥の院へ詣す、宿坊より二十丁〻一ノ橋といふを過て、左に毒水玉川あり、わすれてもの古歌を石に刻し立たり、慶長十六年建る所〻、中の橋左の路傍に汗かきの地藏姿見の井あり、右に蛇柳といふあり、左に織田信長筒井順慶等の五輪、左に、明、智、光、秀、の、石、塔、中、央、より、臺、石、迄、裂、たり、是、主、君、を、殺、逆、の、罪、に、依、て、如、此、といへり、無明の橋を過て本堂〻、後の方奥の院の堂は大師御入定の處〻、左に骨堂右に藥師堂木食堂本堂より一ノ橋の橋迄の間左右に禁裏世々の帝王親王家の五輪將軍家御年廻の御塔婆幷に國々諸侯の五輪石堂靈屋連綿と立並ひたり、別當誓願寺山内諸侯の坊宇

算ひつくしかたし、寺領二萬千石七堂伽藍は去々年燒失すといへり、誠に高野山は兩部曼荼の靈場大師禪定の勝地にして宗々の祖師諸山の高德歩みを運ひ代々の　天子世々の將軍信を寄せたまひ、大名高家百姓町人貴となく賤となく菩提をとむらひ、繁昌を祈るの靈地なり

○高野山其曉の松風に
うき世の夢もさめやしつらん

北室院へ戻る、饗應頗る叮嚀を盡せり、晝頃旅裝を束ね暇を告けて出立、神谷迄戻り此所より道を左に取九度山、西町に至る二丁斗南の方に二尊院といふ有り、大師御母公の御廟所なり、山上に丹生七社大明神の社あり、西町に戻り宿す、客舍森屋勘助道を取事四里。

十二日天氣快晴

五ツ頃同所より舟を雇ひ乘船し、吉野川の下流紀の川を下り藤崎といふ處あり、川中に岩石の孤島丌として頗る山川の奇景ゝ

○むらさきのゆかりなく山と川とに
名に流れなん

右に粉川寺根來寺を觀し、岩手を過八軒といへる所に着船す、紀州より大阪への街道にして商客多く賑へり、此所より道を右に取日前の社へ詣す、經營は結構ならすといへとも當國一ノ宮にして古社なり、紀三井寺に至る寺中頗る廣大にして本堂より和歌の浦淡路島他島沖の島神島眼下に眺望し甚勝地なり、麓大門先より十八丁の處小舟にて渉り、和歌の浦に至り玉津島へ詣す拜殿は和歌の浦永面へ掛け造りしにて本社は少しく放れて山

腰にあり、則此山を脊山といふよし、左に龜遊岩鶴立石あり、後に三の石橋ありて是を三斷橋といへり、傍に芦邊屋朝日屋の茶店あり、左は琴の浦布引の松あり、龍燈の松ともいへり、名草山は紀三井寺の方に當てあり、五丁程西に東照宮の御宮あり、石の鳥居を過て朱塗の橋石階を登り樓門次に唐門左に藥師堂右に三重の塔、御拜殿御本社鐘樓繪馬堂殘りなき經營にして結構を盡せり、左の方に相並んて天滿宮の社あり、是亦美麗を飾れり、別當雲蓋院山下の海邊をかたを浪といへり、妙見の社望海樓の古跡妹脊山養珠寺此邊を芦邊といへり、海邊の松は麗色滄々として和歌浦の風光旅中の眞妙此地にあり（聖武天皇神龜元年冬十月勸請衣通姫於紀州海部郡崇玉津島明神是月天皇至玉津島頓宮留十有餘日時帝以弱浦景堪遊覽名更明光浦と原文に朱註せり）

○わすれめやみるめうれしき和歌の浦
　みかく玉藻の數ならぬ身も
○言の葉のさかえをわかの浦浪に
　かけてそ仰ふく玉津島姫

當所に宿す、旅亭米屋榮藏行程川陸十里。

十三日朝より細雨

五つ頃出立、若山街道右の路傍に五百羅漢寺、後の山上に秋葉の社程なく右の方に愛宕の社圓珠寺といふ寺あり、城下入口道の左右に根上りの松あり、根上り高低ありといへとも七八尺より一丈餘に至り根を顯せり、御城は右の方にして天守石垣巍巍然たり、城下民屋揃ひ諸士の第宅甚よろし、藩中平生登城次肩衣にて名古屋に同し、宜、敷、國、禁、を、守、る、と、み、へ、て、士、以、下、町、人、に、至、て、は、

婦女子といへども絹布を着せしもの嘗てみへず、凡若山領南海にして後は山暖國にして田野ひらけ豊饒の地なり岡の社に詣し、中の島に至り時鳥の松を一見し北の町といへる所に本願寺あり、二丁程西にして鷺の森、夫より紀の川を舟にてわたり右の方梶取村又淨土宗本山總持寺といふあり松江に至る、此邊多く耳磨を作る、磯の浦に至る、此處の茶店にて糸切餅といふを鬻けり、加太に達し淡島明神へ詣し四國へ渡海故當所に宿す、柳屋善藏行程四里。

十四日雨晴風吹

五つ頃出船、右は大阪への海路なり、右に友ケ島一名苫ケ島淡路島、須本(洲本)、由良を右に見又島を左に取紀州崎を遠望し鳴戸を右にして阿州撫養に着船す、此日風波あらく船中甚心よからす、

旅舍坂田屋惣助海路十三里。

十五日天氣晴明

明半頃出宿、早崎といふ所を過て矢武村に羅漢寺あり、莊嚴院地藏寺といへり、寺内より道を左に取山坂にして一本松越といふ峠あり、阿波讃岐の境にして此處迄徳島侯領所なり、引田を右に取山中村といふに至る、路傍に森權平明神といふ社あり、長曾我部盛親と接戰の節討死の士を祀るといへり、白鳥の社へ詣す、社領三百三十石にして大社なり、町田に達し宿す、津田屋幸八行程十三里。

十六日天氣晴明

明間もなく出立、街道より道を右に取鶴羽より津田に至る、此の間平坦の松原にして左に八幡の社右は海面にして往還よろし、

津田を過てぶとう峠海士峠といふ有り、夫より志渡寺に至る、本尊觀世音房前公玉取の舊跡なり、右の方二丁程隔て志渡寺奥の院にして、園子尼の屋布跡といふ標石あり、十丁程行て右に矢タ り山聖天への道あり、夫より牟禮に達す路傍左の方に古松六七株ありて、佐藤繼信墓と石に鐫し立てり、討死の所は三丁斗北にして射落しの畑とて今にあり、二百有餘年を過て至徳元年四月五日奥州の信空とて繼信氏族の僧歌を讀〇〇在りし事等世傳にあり、傍に馬の塚あり、太夫黒馬埋處と刻す、薄墨と名付て義經の寵愛ありし名馬繼信に給はり繼信討死の日此馬に乘りしか、は、死後に弔の爲志渡寺へ送りしか、食を斷此所に來舌を喰て死、せしとなん、石碑は寛文二十年に建る所ゝ、元暦元年より今年弘化三年に至て六百六十三年ゝ、五丁程北に惣門の跡とて畑の中

にしるしの門を立置今に至り國君より修造有といへり、十丁程にして壇の浦なり、洲崎堂といふ寺あり、門前に源平古戰場と石に刻し立たり、此所渚に祈り岩駒立石抔いふあり、那須與市扇的を射し所ゝ(文治元年春二月義經焚屋島皇居那須宗高射扇的同三月平家諸族悉沒西海と原文に朱註せり)此所より屋島への路傍右の方に安德帝の宮、間もなく一堆の高き所古松の本に次信の碑銘あり、是又寛永二十年に建る所ゝ坂路十三丁登り山上屋島寺にして、南面山といへり、境内より四五丁西の方に獅子靈巖と云所あり、此所より讃岐の島島、高松の城下、城は平城にして海面に築出し麓は鹽濱にして鹽屋相並ひ奇景いふ斗なし、本門より十三丁坂路を下り高松街道に出北村といふ所より道を左に取二里にして佛生山に至る、法然寺と云り、折節本尊開扉にして

老若貴賤引きもきらす群集す、惣門を過て二の門次に本堂々、左に三佛堂と云あり二王門を過て二尊堂山上は菩薩堂々、寺領三百三十石淨土宗にして寺內廣大々、高松侯菩提所といへり、門前の方に藤（ヂキリ）大明神の社あり、當所に宿す、旅亭車屋治右衛門行程十三里。

十七日天氣晴明

明六つ間もなく出立、道を右に取平岡十三塚を過て瀧の宮に至る、驛中右の方に天滿宮の社又程なく祇園の社あり、此邊より、象頭山みゆる、山の形象の伏したる如く、頭の方、山腰、金毘羅宮鎭座、々、象頭山の名あり、金比羅に至り麓町中頃に一の鳥居あり、町は甚繁華にして坂を登り、二王門傍に淸少納言の塚ありて碑銘を立てたり、坂を登り右の方に別當あり、金剛山松尾寺といへり、左に神馬堂少少登り右に二重の塔諸佛堂、左に藥師堂ありて、總彫物にして結構善美を盡し金堂とも稱へり、少々坂を登り金毘羅宮本社々、左に經堂觀音堂繪馬堂あり、坂路左右麓より本社迄石の玉垣にして數百の燈籠何れも諸國津々浦々より寄進々、參詣は都鄙遠境といはす、袖をつらねて群集する事伊勢兩宮に亞くへし、社領三百三十石麓に下り道を左に取右の方に飯野山と云あり、讃岐小富士ともいふ、善通寺に至る勅願所にして寺內廣大なり、庭前南の方二丁斗に西行久の松とて古松あり、菴をむすへり、夫より彌谷に至る路傍に西行芋畑の古跡あり、彌谷は大師御入學の靈場にして劍五山彌谷寺といへり、本堂の傍より道を右に取麓に下り十丁餘にして屛風ケ浦に達す、大師御生誕の所にして大師堂有り、寺を白峯寺といへり、甚景地なり多度津に至る

路傍左の方に八幡の社あり、多度津は廻船着岸の地にして甚繁華なり、領主京極壹岐侯祿地一萬石、中津川を過て丸龜に至る、是又繁昌の城下にして城は山城にして右の方にあり、城主京極長州侯采邑五萬千五百石、阿波讃岐は山中樹木至て不足にして、大抵小松のみなり用水極めて不自由にみへたり、兩國共に堤(?)多し、丸龜客舍柏屋團治道を取事十四里。

十八日天氣晴明

同日日の出を待て出帆し、左は讃岐阿波の島山、右に備前の玉島備後の鞆安ぶと其外島々を眺望し殊に天氣朗に浪靜にして頗る吟望に堪たり、田島といへる所に舟をよせしはらく汐あいを待つ、此所備後福山阿倍勢州侯の御領所なり夜に入少々雨降。

○たくひなみなきたる朝に舟出して

みるめもあかぬ沖つしま山

十九日雨止朝の間七つ頃より雨降

同日早天に出帆す、順風にして右に備後の尾の道三原を見、藝州の忠の海竹原長濱左にカマカリ杯の浦々を過、七つ頃より雨降風立、舟子とも辛苦してアガといへる所に舟をよせ泊す。

○風あらみしはしと思ふ夢たにも
波の枕にむすふ間そなき

廿日天氣快晴

同朝汐時よろしからす、出帆見合す內ひろの瀧を見物す、此所より五十丁斗北の山間にあり、瀧は餘り高からす八九丈の間二段に落る、岩にせかれて幾度となくあやなすさま殆奇景なり

○せきかへる岩間の波の花とちり

玉とくたくるひろの瀧つせ

晝過より出帆し、音戸と云所に至る、此所いにしへ地續きの山なりしか、平相國山谷を切ひらき、宮島への通路自由なさしめし處といへり、清盛の墓ゝとて海へ築出し一株の松並又五輪あり、此浦民家甚よろし夜九つ半頃廣島へ着船し泊す、丸龜より宮島へ海上五十里すくに同所へ着船順路といへとも廣島への便船にて渡海せしゆへ同所へ舟をよせ泊す。

廿一日天氣吉七つ頃より雨降

同四つ時出帆、風よろしからす、宮島へ舟路五里七つ頃着船す、宮島旅宿中屋新助。

丙午紀行 前編 (天) 終

160
94